

福井支部ニュース

2024年度 第2号

日本科学者会議福井支部

連絡先：山本雅彦、masahiko@mbp.nifty.com

郵便振込口座番号 00710-9-17967 日本科学者会議福井支部

支部ホームページ <https://jsafukui.net/>科学者会議本部 <http://www.jsa.gr.jp/>

今号の内容

- ◆学術会議会員任命拒否不開示裁判 第1回口頭弁論 (原告 小森田秋夫)
- ◆評論 川村講演「勝山市の中学校再編計画反対運動の検証から『民主主義における科学』を考える」 (寺岡 英男)
- ◆書評 井関正久著『ルディ・ドウチュケと戦後ドイツ』 (小野 一)

〔拡散依頼〕学術会議会員任命拒否不開示裁判

第1回口頭弁論 (原告 小森田秋夫氏 Facebook から)

東京地裁での第1回口頭弁論に原告の一人として出席した小森田秋夫さんがFacebookに投稿された文章を、許可を得て拡散いたします。

大学フォーラム事務局 井原聡 (編集子：以下は、大学フォーラムからの拡散依頼メールより、小森田氏の文章をそのまま引用)

5月29日、東京地裁で、学術会議会員の任命拒否をめぐる情報公開を求める行政訴訟の第1回口頭弁論が行なわれた。52の傍聴席が満席となった。

審理時間は合計わずか30分だったが、原告でもある弁護士2人と任命を拒否された加藤陽子さん、岡田正則さんの4人が意見陳述を行なった。弁護士が原告席で陳述したのに対して、加藤さんと岡田さんは、証言台に立ち、裁判長に向かい合って陳述した。

私が心を打たれたのは、次のような一節である。加藤さんは、次のように述べた。

「任命拒否という事実それ以上に私を苦しめたのは、内閣総理大臣や内閣官房長官等がその後に繰り返した言葉『人事のことなので説明を差し控える』に他なりません。あたかも拒否された側に欠格事由あるいは忌避される理由があり、それを庇っているかのような言葉遣いは、入学試験や入社試験に不合格となった人に大学や会社は説明などしないとの、比較としては全く不相当であるにもかかわらず、腑に落ちるアナロジーを人々に想起させました。このような言葉は、拒否理由の説明を内閣側に求めている私どもの態度を冷笑するような一群の人々を生み出す効果を確かに持ちました。週刊誌記者の自宅訪問、SNSでの誹謗中傷等はもちろんございました。」

岡田さんも、次のように述べた。

「内閣総理大臣のこうした対応によって、6名は拒否理由をさまざまに憶測される対象とされ、この結果、インターネット上などで中傷の対象とされることになりました。／私個人についていえば、2020年10月から11月にかけて、根拠のない中傷にさらされました。それだけでなく、担当の法学部ゼミのホームページやツイッターに心無い書き込みが多数なされて、学生に対する攻撃も行われました。このような状況は、一人の研究者・教育者として堪え難い事態です。」

任命拒否は、学術会議の自律性に対する侵害であり、岡田さんも上記の一節に続けて述べたように、「日本の学術にとってもきわめて有害な事態」である。そのような観点から、任命拒否の違法性が論じられ、任命拒否という判断の経過と根拠を示す情報の開示を求めているわけである。

しかし、任命拒否が拒否された当事者にとってどういう意味をもっているということについては、あまり注目されることがない。加藤さんと岡田さんは、あえてそのことに触れることによって、裁判所の注意を喚起したのである。

加藤さんの意見陳述が終わると、法廷から小さな拍手が起こった。傍聴席で拍手することは一般に認められていない。しかし裁判長は何の反応も示さなかったの、オヤッと思った。岡田さんの意見陳述が終わったとき、また小さな拍手が起こった。すると裁判長は、拍手は許されていないと注意したうえで、「拍手は心の中で」とつけ加えた。

訴訟のゆくえという観点から見て重要だったのは、次の点である。被告の国側は、原告の主張に対する認否だけを述べた書面を提出したにとどまり、具体的な主張は次回に行なうことになった。それについて裁判長は、国（内閣官房と内閣府）が文書の「不存在」を理由に「不開示」としている点について、

「不存在」とは「物理的不存在」を意味するのか「解釈上の不存在」を意味するのか、態度表明することを求めたのである。「物理的不存在」とは、文書が物理的に存在しないということの意味し、この場合は、もともと存在しない（作っていない、取得していない）のか、存在していたが破棄されたのかが問題になる。いずれにしても、「ない」で済ますことのできない事情である。

「解釈上の不存在」とは、情報公開を求められている文書は情報公開法の対象外であるなどの理由で開示する必要がない、とするものである。この場合も、法的な論争となる。というわけで、「不存在」の意味はこの訴訟にとって本質的な論点であり、弁護団はこれまでも重視してきたが、情報公開審査会の不開示決定はこれを重視していなかった。裁判長は、まさにこの論点を突いたのである。このほか、情報を公開するかどうかの判断権者は誰で、それを誰に委任したのか、その法的根拠は何かを明らかにすることも求めた。

裁判長のこのような訴訟指揮に、素人の私も「オッ」と思ったが、弁護団にとってもいい意味で思いがけないことだったようだ。それだけに、裁判長がやがて交替する（させられる）のではないかと、という危惧も語られていた。

次回は、7月16日（火）11時30分に予定されている。

支部ニュースへの寄稿・投稿を

支部ニュースを支部会員間の交流の場とするため、積極的な寄稿・投稿をお願いします。

- ◆ジャーナル評論：「日本の科学者」「福井の科学者」の評論
- ◆時事評論、意見・見解
- ◆活動報告・経験報告・事例紹介
- ◆行事案内、会員への案内・お知らせ

その他、エッセー、書評、文芸作品の紹介など、何でも支部ニュース担当者までメールでお送り下さい。yamane@f-edu.u-fukui.ac.jp
ogura@u-fukui.ac.jp

【講演の評論】川村信治氏の講演「勝山市の中学校再編計画反対運動の検証から『民主主義における科学』を考える」

5月11日（土）福井支部第54回総会に先立ち、14:00から上記講演会が行われた。その概要は、今年度支部ニュース第1号で報告されているが、ここでは改めて講演内容と私の感想を書かせて頂く。

この講演で報告された勝山市の中学再編計画については、これを審議する市議会での緊迫した状況や、再編反対の取組みを進める活動などが、新聞報道で県民に伝えられている。講演者の川村信治氏は、この取組みの中心的なメンバーである。

2021年に再編計画案が市民に提示された後、「勝山市の教育の未来を考える会」が10名ほどでつくられたが、今は80名ほどに広がっている。そしてこの間、学習会、市長や教育長との懇談や意見表明、区長やPTAなど関係者への働きかけ、市民集会や校区ごとのミニ集会、二度にわたる署名活動や要望書・陳情書の提出などを行ってきた。2回目の署名活動では8千名を超える市民の署名を集め、またメンバーの中から新たに3名の市議を当選させている。今の課題は、再編計画の凍結（撤回）と民主的な姿勢の回復であるという。

講演では、こうした再編計画の反対運動の紹介を挟んで、講演テーマにあるように、「民主主義における科学」という観点からのこの運動の方向性と経過を考察・探究し、意味づける知的な読みが語られた。以下、一部を引用させていただく。

例えば、「支配層の常套手段は、偽りや『神話』で事実や真実を覆い隠し、市民に間違ったことを信じ込ませること」。「これらに対して、科学者や科学を手にした市民が指摘をし暴くことが、民主化のためにどうしても必要になります。」「これは、専門家のすることではなくて広く一般の市民が共同でなくてはならないことです。…それは、近代において始まった科学のありかたそのものに内在している性質であり、…広く市民が共同ですることによってのみ、対抗の可能性もあり、そこに創出される社会が民主的になる保証と方法になり得るのです。」「科学的真実とは反証されるまでの時限的真実であり、

反証にさらされるようにデータや方法を開示して検証を可能にしたものでなければなりません。まずもって行政がそのようなものである必要があります。」

「国民的な組織は地域的なコミュニティを基礎にしなければならない…めいめいが住む地方において、それぞれ満足できるような生活を送れるようにすること、これが真の人間的自由の要求である。」「専門性の深い経験による専門家と、専門外で経験も浅い人が、互いに信頼し合うことが必要で、どちらも努力を傾けることが必要だと感じられます。その基盤の上で、より有効な方法の一つは、地域コミュニケーションを主体としてそこに集中した思考や活動から始めるということです。」

講演では、こうしたことを、H.コリンズ・R.エヴァンス、T.ピケティ、H.J マッキンダー、K.マルクスなどを引用しながら、反対運動の取組みを意味づける努力が真摯に語られた。

私の意見を1つ述べさせて頂きたい。それは講演の中で触れられたもので、今回の再編計画が「勝山高校存続の観点」から発案されたということに関わる。中学を卒業し地元勝山高校へ進学する割合が減少していること、その背景を考えると、そこには2004年度からの藤島・高志の学校群の廃止と全県一学区化した県の高校再編の問題があると思われる。この再編に際しては、それによって福井市内の高校へ受験生が集中しない配慮を理由として新たな連携型中高一貫教育の提案も併せなされていた。その対象としてあげられたのは、坂井、丹南、嶺南を中心とする地域であったが、奥越地区も免れないことは言うまでもないと思われる。その意味で問題は、勝山での中学再編とそれを頑なに推し進めようとする市長や教育長の姿勢に止まらない、県が行った高校教育再編の問題との関連が問われていると思われる。これは講演資料の中で引用されている、「地域的なコミュニティを基礎とする組織づくり」に直接関わる。そこでつとにマッキンダーは問題を指摘している。「今のように地域的コミュニティから大都会にむかって、若い優秀な頭脳が滔々と流れ込む状況を放置する限り、組織の力は不当に都会に集中し、やがて国民全体を通じて階級と利害を基調とした組織に必然的にみちびくほかはない」、と。

最後に、反対運動の、考え抜かれ、steadyな取組に敬意を表するとともに、課題の達成を祈りたい。

(寺岡 英男)

【書評】『ルディ・ドゥチュケと戦後ドイツ』

井関正久著 株式会社共和国 (2024/5/6)

「死からほぼ四半世紀経った2003年に第二ドイツテレビ(ZDF)がおこなった視聴者アンケート「われわれの最高で偉大なドイツ人」でも、ルディ・ドゥチュケは第85位と、ベスト100にランクインしている。・・・このアンケートで、ドゥチュケは「自由、連帯、革命、社会主義を追求する情熱的なスピーチによって、議会外反対派のスターとなった」と評された」(258頁)。

戦後史を語るのに欠かせないキーワードの一つが「1968年世代」である(あえて対応する日本語を探せば「全共闘世代」)。ヨーロッパで、アメリカで、やや文脈は異なるが日本で、学生運動が高揚した60年代後半。それは戦後西欧社会の転換点であり、新たに持ち込まれた価値観やライフスタイルは、運動が衰退した後にも持続的な影響を及ぼしている。上の引用からもわかるように、ルディ・ドゥチュケは学生運動指導者にふさわしい風貌、弁舌の才、革命への情熱を備えていた(写真)。ベトナム反戦をはじめ、第三世界と連帯する運動を大学のキャンパスから実践した。「プラハの春」には現地を訪れ、人々と語り合った(訪問時点ではソ連軍の介入は予見していない)。一躍時の人となる中、1968年4月11日、極右テロリストの銃弾に倒れる。療養のためヨーロッパを転々とし、学究・政治活動も再開するが、後遺症により1979年12月に40歳の若さで天逝する。

著者の井関正久はドイツ政治研究者。『ドイツを変えた68年運動』(白水社、2005年)などの著作がある他、『思想』2018年5号の特集「〈1968〉」に寄稿するなど、新社会運動研究の第一人者である。今回、ドゥチュケの生涯を追った著作を刊行した。この種の個人史研究では、感情移入は珍しくない。だが本書が類書の焼き直しでないことは、強調に値する。冷戦終結から時を経て、封印された新事実が次々に明らかになった。現代史の批判的再検討は、閉塞の時代を生きる私たちにもアクチュアリティをもって迫ってくる。

ドゥチュケは東ドイツ生まれ。成績優秀でスポーツでも活躍したが、兵役を拒否し大学進学のを断られる。ベルリン自由大学に入学資格を得るが、ベルリンの壁建設により家族と引き裂かれてしまう。西ベルリンのカフェで仲間と出会い、東ドイツのイデオロギーとは別の「真のマルクス主義」に触れ、「自由とはつねに、異なる考え方をもつ者の自由である」と述べたローザ・ルクセンブルクに心酔し革命家を志す。ルカーチやマルクーゼなどの思想家から薫陶を受けるが、幼少よりのキリスト教的価値観も社会主義と無矛盾なものとして保持し続けた。当時の左翼学生の拠点は、社会主義ドイツ学生同盟（SDS）である。学生運動が急進化する中、1967年6月2日、オーネソルク射殺事件（イラン国王の西ベルリン訪問に抗議するデモに参加した学生を、警官が射殺した事件）が起こる。今やマスコミから引っ張りだこの有名人ドゥチュケには、敵も多かった。保守系出版社シュプリングァーの刊行物は、偏った報道として新左翼学生には象徴的な批判対象とされた。シュプリングァーではないが、極右系の『ドイツ国民新聞』の1968年3月22日号は「ドゥチュケを今止める！ さもないと内乱が起こる」との見出しを掲げた。



結果として、ドゥチュケ銃撃の実行犯はこうしたキャンペーンに煽られたわけである。だがドゥチュケ自身にも、政治的暴力は悩ましい問題だった。彼は平和主義者でないと公言していたし、爆発物の運搬に関わったこともある。超大国の軍隊や国家権力が暴力を振りかざす時、抵抗運動側のテロは正当化されるか、非暴力の市民的不服従に徹するべきか。もちろん当時と今では状況が異なるし、先進社会と権威主義体制下とでも違いがある。襲撃後のドゥチュケは、テロリズムは何も生まないと、過激化するかつての同志に批判的態度をとるが、「われわれは、まだ誰もみたことのないような世界、すなわち、もはや

戦争や飢餓のないような世界を、世界中につくりあげることができる」との野望は生涯続けた。晩年（というには若すぎる）は、創生期の緑の党に希望を託した。

編年体のライフヒストリーを総括して、著者は言う。「これまでのドゥチュケ論争では、一つ重大な問題が見落とされている。・・・結果的に運動が急進化するきっかけをつくっていた、東ドイツのシュタージや西ドイツの憲法擁護庁の諜報員たちの存在である。彼らの行動の全容が完全に解明されない限り、「ドゥチュケと暴力（思想）」をめぐる論争も不毛なものになりかねない」（262頁）。

少し解説が必要だろう。オーネソルクを撃った警官が、実は東側秘密警察シュタージと非公式の協力関係にあったことが、2009年になって明るみに出る。ドゥチュケ襲撃直後に学生たちがシュプリングァー出版社接収の行動に出た時、火炎瓶を配ったのは西ベルリン憲法擁護庁のスパイで（正体は後になって判明する）、上司である内相は屋上から見ていて警官に出動命令を出す。冷戦時代の政治の暗部である（日本も含め西側諸国では、社会主義国の悪事なら飽きるほど聞かすが、西ドイツ政府の謀略が取り上げられることはまずない）。繰り返しになるが、本書は一活動家のライフヒストリーを超え、戦後史を問い直す貴重な問題提起を含む。ヨーロッパで極右の復権が深刻化する今日、時代の象徴的人物の「脱神話化」が、日本に生きる私たちに問いかけるものも少なくないのである。

（小野 一）

＜＜編集後記＞＞

2024年度支部ニュース第2号をお届けします。

菅政権が2020年に初めて学術会議会員の任命拒否を行いました。拒否理由の開示を巡る裁判がやっと始まり、第1回口頭弁論が開かれました。政府の作成・管理する公文書データは全て手元にありますから、そのデジタル化は最も容易なはずなのです。「モリカケ」「サクラ」では存在していた公文書さえもわざわざ改ざん・破棄して「不存在」を主張しました。DXのキモと位置づけたマイナカードの普及に、マイナポイントをばらまき、保険証にくっつけて診療費値上げ、という頓珍漢、「デジタル後進国」の面目躍如ですね。TSMCだけでなくデジタル大臣タン氏にも来てもらったら・・・？！（OG）